

# 琉球大学学術リポジトリ

## 繁殖雌豚の育成

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語:<br>出版者: 琉球大学農家政学部<br>公開日: 2011-07-22<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 宮城, 悦生, Miyagi, Etsuo<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/21269">http://hdl.handle.net/20.500.12000/21269</a>                         |

# 繁殖雌豚の育成

## 1. 育成の要訣

一般農家における繁殖雌豚の育成方法は、肉豚として飼育したものの中から発育が速かで、体形のよいものを繁殖用として選定している場合が多いが、このようなことでは良い子豚をより多く生産することは困難である。

良い子豚を多く生産するためには、やはり繁殖豚は子豚の時からはっきり区別して、それにとりなう飼養管理を行うべきである。すなわち、繁殖用子豚は育成時代から肉豚よりも蛋白質を多給し、カルシウム、ビタミンの給与にも留意するとともに、飼料を多給しすぎて肥満にならないよ

うに注意し、飼料標準に合致した飼料給与を行ない、運動も十分にさせ、まず胴伸びがよくがっちりした骨格をつくることが肝要である。いわゆる中肉程度に育成し、栄養の充実をはかり、肥満を避けなくてはならない。

一般に肥満した雌豚は次のような繁殖障害をおこすものである。

- (イ) 卵巣および輸卵管の生理作用を阻害する。すなわち、卵巣機能が減退し、発情微弱で受胎率も悪く、産子数も減少する。
- (ロ) 子宮および産道が圧迫され、死産、流産或いは難産の原因となる。

(ハ) 乳腺の発達が妨げられ、したがって泌乳量が減少したり、或いは停止することもある。

(ニ) 肥満した雌豚は体重が重いので起居が不自由となり、房内で子豚を踏んだり、または圧死させることが多い。

以上のことから、繁殖雌豚は肥満を避けなくてはならない。ひとたび過肥に陥らせると、その後給与飼料を低減し運動を課してやせらせても、皮下脂肪は減退するが、内部生殖器周辺に沈着した脂肪は容易に減退しないものである。

したがって繁殖雌豚育成の要訣は中肉で胴伸びのよい豚をつくることである。

## 2. 繁殖豚の発育

繁殖雌豚は短期間にあまり発育を促進させると、脂肪太りになり、前述のような繁殖障害を起し、不成績に終ることが多いので、一応標準に合致した発育をさせることが肝要である。

その目安について示せば第1表のとおりである

第1表 種豚の発育標準 (kg)

| 種別           | 月令      | 生後      | 3       |         | 4       |  | 5  |  | 6    |  |
|--------------|---------|---------|---------|---------|---------|--|----|--|------|--|
|              | 2カ月     | 2カ月     |         |         |         |  |    |  |      |  |
| 中型種(Y. B)    | 12—17   | 20—25   | 30—35   | 40—50   | 55—65   |  |    |  |      |  |
| 大型種(L. W)    | 15—25   | 30—40   | 45—55   | 60—70   | 80—90   |  |    |  |      |  |
| 1代雑種(YL. BL) | 15—20   | 25—30   | 35—45   | 50—60   | 70—80   |  |    |  |      |  |
| 種別           | 月令      | 生後      | 8       |         | 9       |  | 10 |  | 完熟体重 |  |
|              | 7カ月     | 7カ月     |         |         |         |  |    |  |      |  |
| 中型種(Y. B)    | 70—80   | 85—95   | 100—110 | 115—125 | 200—250 |  |    |  |      |  |
| 大型種(L. W)    | 100—110 | 115—125 | 130—140 | 145—155 | 250—300 |  |    |  |      |  |
| 1代雑種(YL. BL) | 85—90   | 100—110 | 115—125 | 130—140 | 230—270 |  |    |  |      |  |

繁殖雌豚の体格は 体長と胸囲の比率

胸囲—85—90%が適当である。

体長—胸囲が体長と同じかそれ以上の場合は肥満したもので、繁殖用のタイプとはいえない。

Y—中ヨークシャー B—バークシャー  
L—ランドレース W—大ヨークシャー  
YL—ランドレースと中ヨークシャーのF<sub>1</sub>  
BL—ランドレースとバークシャーのF<sub>1</sub>  
体長—両耳間中央部より尾根部までの長さ

## 3. 飼料の給与量と配合

### (1) 給与量

飼料の給与量は配合飼料や糖類のような乾燥飼料を離乳直後、体重の約5% (日量) からはじ

め、徐々に下げて繁殖供用開始前には体重の2.5%位与えると適当であるといわれているが、その量は品種や発育度によって多少異なり、ランドレース、大ヨークシャーなどの大型種、特に育成豚においては採食量が多いので、従来の中型種 (バークシャー等) より、10~20%飼料給与日量を増加することが望ましい。

大型種の飼料給与月量と給与飼料の栄養価は第2表のとおりである。) )

第2表 大型種 (ランドレース、大ヨークシャー) 育成飼料給与基準

| 月令  | 標準体重    | 飼料給与量   |         | 青刈飼料給与量 |       | 給与飼料の栄養価 |     |
|-----|---------|---------|---------|---------|-------|----------|-----|
|     |         | (kg)    | (風乾物)   | (生)     | (生)   | DCP      | TDN |
| カ月  | kg      | kg      | kg      | kg      | %     | %        |     |
| 生後2 | 15—25   | 0.8—1.0 | 0.2—0.3 |         |       |          |     |
| 3   | 30—40   | 1.2—1.5 | 0.3—0.4 |         | 12—14 | 70—72    |     |
| 4   | 45—55   | 1.7—2.0 | 0.4—0.5 |         |       |          |     |
| 5   | 60—70   | 2.2—2.5 | 0.5—0.6 |         |       |          |     |
| 6   | 80—90   | 2.5—2.8 | 0.6—0.8 |         | 10—12 | 68—70    |     |
| 7   | 100—110 | 2.8—3.0 | 0.8—1.0 |         |       |          |     |
| 8   | 115—125 | 3.0—3.2 | 1.0—1.2 |         |       |          |     |
| 9   | 130—140 | 3.2—3.3 | 1.2     |         | 9—10  | 67—70    |     |
| 10  | 145—155 | 3.3—3.5 | 1.2     |         |       |          |     |

D. C. P—可消化粗蛋白質

T. D. N—可消化養分総量

### (2) 配合

いかにすぐれた飼料でもそのもの単味では、栄養上完全ではないので、なるべく数多くの種類を配合した方がよい。飼料はその含有栄養素の内容によって、いも類、穀類などの澱粉質飼料とフスマ、米ヌカなどの糟糠類飼料及び大豆粕、魚粕、脱脂粉乳などの蛋白質飼料に分けられるので、実際に飼料の配合をする場合には、これらの質の異なる飼料を適当に組合せて、第2表に示されている給与飼料の栄養価を満たすように配合する。その他にカルシウム剤(コロイカル等)2%位、食塩0.5%を添加する。又、大型種は一般に発育が早いので、特にビタミン類及びその他の微量成分の給与にも留意し青草を十分に与えるようにすべきである。

沖繩で容易に得られる単味飼料を用いての配合例を第3表に示します。

いもを配合する場合にはトウモロコン、マイロの变りに乾物比で生後3~4カ月30~40%、5~

第3表 育成豚の飼料配合割合

| 飼料            | 月令    |       |        |
|---------------|-------|-------|--------|
|               | 3-4カ月 | 5-8カ月 | 9-10カ月 |
| トウモロコシ        | 35%   | 35%   | 35%    |
| マイロ           | 17    | 17.2  | 17.2   |
| フスマ           | 25    | 25    | 25     |
| 大豆粕           | 8     | 6     | 4      |
| アルファアルファー(乾)  | 6     | 10    | 13     |
| 魚粕            | 6     | 4     | 3      |
| カルシウム剤(コロイカル) | 2     | 2     | 2      |
| 食塩            | 0.5   | 0.5   | 0.5    |
| ビタミン剤         | 0.4   | 0.3   | 0.3    |
| 抗生物質          | 0.1   | —     | —      |

8カ月40~50%, 9カ月以降は45~55%用いた方がよい。

生いもを使用する場合には重量にしてその3倍を与える。例えば、生後3カ月の豚でいもを30%使用するならば、100kgの飼料を配合する場合に30kgの乾燥したいもを必要とするが、生のいもはその3倍で90kg必要とする。

#### 4. 育成豚の管理

離乳前後の飼育はその豚の一生を左右する場合が多いので、その飼養管理には慎重を期さなければならない。特に飼料の給与には注意すべきであり、離乳後1カ月位は市販の子豚用配合飼料を用いた方がよい。なぜならば、自家配合飼料ではとくに蛋白質の不足、無機成分などの添加が不十分であるため種々の欠陥をまねき発育をおくらせるおそれがあるが、市販の完全配合飼料は高蛋白、高エネルギー飼料を配合し、無機成分、ビタミン類も添加されており、さらに下痢を予防し、発育を促進する抗生物質飼料添加剤が加えられているので、発育も順調で労力的にも容易である。若干経済的には負担であるが、事故も少なく、簡便であるので、離乳直後の育成飼料としては、信用のある完全配合飼料を用いた方が安全である。

なお離乳後20日位して完全に飼料になれば、蛔虫駆除を行い、更に1.5カ月後、もう一度駆除した方がよい。

又、日常の管理についても細心の注意を払わなければならない。特に離乳直後の子豚は雨にあてたり、どろんこにしたり、或いは寒い時期に冷やしたりすると下痢をおこしやすいので、常に身体

を乾かしておくようにし、寒い時期には豚房は敷草などを十分に入れ或いは赤外線電球などを用いて保温をするとともに、排糞の状態に注意し、異状を早く発見し、その原因を調べて早急に治療するようにしなければならない。

次に運動を十分にさせるようにする。運動は筋骨の発達をはかることの他に、太陽光線に当ってビタミンDをつくり、土を喰うことによって鉄分を補給するなどの栄養上の意義が大きいので、繁殖豚では豚房に運動場を付設し、自由に運動させるとよい。特にランドレース、大ヨークシャー等の大型種は、放し飼いで十分に運動させることが望ましい。

#### 5. 繁殖供用適令期

一般に豚は生後4~5カ月遅くとも6~7カ月には発情をみるが、排卵をともなう発情は生後7カ月以上で体重75kg以上になってからである。この時期から繁殖に用いることができるが、実際に繁殖に用い始める時期は体発育との関係や繁殖供用後の影響なども考慮しなければならない。

あまりはやく繁殖に用いた場合

- (イ) 排卵数が少ないので、産子数も少ない。
- (ロ) 一般に生産される子豚も小さく、発育も芳しくなく、大小不そろいの場合が多い。
- (ハ) 妊娠や授乳によって母体の発育が阻害されるので使用年限も短くなる。

逆にあまり長い期間種付しないでおくことは、不経済であると同時に、脂肪太りなり、繁殖成績が不良になる場合が多い。

豚の繁殖供用適令期は第4表のとおりである。

第4表 豚の繁殖供用開始適期

| 種別             | 月令   |  | 体重<br>kg      |
|----------------|------|--|---------------|
|                | カ月   |  |               |
| 中型種(Y. B)      | 9-10 |  | 125 (120-125) |
| 大型種(L. W)      | 8-9  |  | 135 (130-145) |
| 1代雑種(Y L. B L) | 8-9  |  | 130 (120-140) |

繁殖供用時期の目安は中型種で生後10カ月で体重125kg、大型種は生後9カ月で135kgとし、遅くとも10~12カ月の間には種付しなければならない。

(宮城 悦生)